

遊工房アートスペースでの調査研究報告
遊工房AIR研究会 調査研究・中間報告

マータ・グラシア
Art Motile (Barcelona) 主宰

2017 遊工房アートスペース (東京)

活動概要

私は2009年にインターンとして初めて遊工房を訪れた。当時、遊工房では Global Internship Programme を1年ほど展開しており、海外のアートマネージャーを最長半年間迎えていた。私のインターンシップは2009年1月～7月、そして2ヶ月間延長して実施した。

私がこのプログラムに応募した理由は、オンライン上で得た情報から理解した遊工房のイメージが基本となっていると記憶している。それは巨大都市東京にある、小さく、フレキシブルで、等身大の組織というものであった。その点は遊工房の最も興味深い側面であると共に、最終的にインターンとしてプロフェッショナル、そして個人レベルの両面で価値ある経験をさせていただいた。

アートのプロフェッショナルとして、アーティストのすぐ近くで働く(過ごす)こととなる国際レジデンシープログラムの運営の日々から、様々な側面の経験を積んだ。プログラムは、彼らの芸術プロセスから生じる需要によって、毎回形作られる。インターンシッププログラムにはおよそそのフレームワークが仮設定されていたものの、私の場合は、自身の経験やスタッフ間との対話を通して発見した共通の関心事項などを適応させた。この有機的なプログラムの展開方法は、両者にとって実り多いものにした。

遊工房がローカルのアートシーンや近隣に根ざしている（1980年代後半より運営、共同代表の村田達彦はそこで育った）という環境は、専門的で個人的な日本での新たなコネクションを築くことを容易にすると共に、家にいるような気持ちにさせた。



2009年滞在作家・デイヴィッド・フランクリンの作品のためのロケハンのため奥多摩調査
2009年2月撮影：左から弘子、私、Jaime、達彦

帰国後、私はスペインのAIR領域で働き始め、遊工房でのインターンシップで行ったリサーチを展開し、スペインAIRの情報プラットフォーム「ArtMotive」の立ち上げを導いた。

2017年、遊工房へは8年ぶりに戻り、日本のAIR領域における新たな展開を学ぶ機会をもたらすと同時に、初めての東京滞在の際に出会い、共に働いた人々との関係を強める機会となった。

今回も議論やリサーチミーティングの事前設定などおおよそのフレームワークはあったが、多くはそこに滞在しながら生じた興味や議論などに沿って調整しながら決まった。主に焦点を当て活動したのは、マイクロレジデンスについてである。遊工房のスタッフと私はマイクロレジデンスネットワークや大学とマイクロレジデンス間の協働（現在リサーチ中の領域）などについて議論を進めた。また、オランダ大使館を訪問し、文化担当官交え、オランダ、スペイン、日本の最新情報の交換が出来た。また、東京近郊の林業地帯である神奈川県藤野町（第2次世界大戦時、多くのアーティストの疎開先にもなった豊かな水源の農村地帯でもある）の調査訪問の機会では、神奈川県の芸術村構想の流れを組むその後の地域創生の動向、AIR運営のその後などの調査、新たな出会いともなった。（詳細内容及び結論は各活動報告書 参照）



藤野に新しく誕生したAIRのスタジオ訪問。

2017年12月撮影：左から弘子、私、デイヴィッドフランクリン（Youkobo Returnee programme参加作家）

結論として、短期リサーチレジデンスのため、遊工房アートスペースに戻ってくることができた本機会を通し、私はAIRの直接的な見識と日本の現在の状況を把握することができた。現在、私は自身が得た情報やアイデア、インスピレーションを整理していると共に、スペインと日本のAIR間で新たなリサーチプロジェクトや交流活動を具体化したいと思っている。

滞在期間: 2017年12月15日 - 2018年1月3日

別紙:

1. 藤野への調査訪問レポート
2. マイクロレジデンス会議
3. オランダ大使館(東京) での文化政策担当官との会議

別紙1. 藤野への調査訪問レポート

訪問動機：

私は、Transartistsの Heidi Vogelsからの紹介を受け、KAIR(神山AIR)への訪問に興味を持った。その理由は、地域住民によって開始した農村地帯にあるAIRという点だ。結局私は今回KAIRへは訪問できなかったが、村田さんが東京から1時間ほどの山村、藤野を紹介してくださった。そこでは1990年代からアーティストや職人を迎えているという長い歴史がある。実はしばらくの間、遊工房はここに国際AIRプログラムの一部として、アーティストのための別館スタジオを所有していた。

藤野FAIR 対 KAIR

私がKAIRについて聞いた情報と藤野の経験を踏まえ、藤野は更に有機的で柔軟で、分散したAIRの可能性を持っているという印象を受けた。藤野では、AIRプログラムを運営しているのは個人や1つの組織ではなく、様々な人やイニシアチブが集結して、招聘作家のプロフィールや需要に適したレジデンス体験を構築している。藤野で素晴らしいと思った点として、自然環境と資源、そしてサステナビリティに関する地域住民の意識の重要性である。更に、藤野が東京からたった1時間の距離であるという立地は、都会のアートイニシアチブとのコラボレーションを育み、招聘作家とAIRの双方に面白い可能性をもたらす。

日本における農村/都市部 AIRの協働（パイロットプロジェクト/プログラム）

私は藤野AIRと遊工房が試験的に共同する可能性を検討する。各3ヶ月の国際AIRプログラムのうち、初めまたは終わりの1ヶ月(アーティストの希望と滞在プランによる)を相手のAIRで過ごすというものである。これは、アーティストに都市部と農村部双方のAIRの恩恵を受ける可能性を与えることとなる。

Microresidence Network内での農村/都市部の協働と交換

遊工房はパイロットプロジェクトのアイデアを共有し、自分たちのエリアで同様のプログラムを立ち上げるためにMicroresidence Networkの他のメンバーを招待し、（おそらく試験的体験と同時に、あるいはその後）様々な国からのアーティストのための交換プログラムを共に展開することができる。

このような声がけは、遊工房がすでに交流/コミュニケーションを取ったAIRなど、遊工房がこのようなプログラムに適していると思う、ネットワークから選ばれたメンバー と話す方がいいだろう。村田さんから共有していただいたリンクで見つけた特に興味深いプログラムは、セルビアの Balkankult Foundation Intereg Residencyとチェコの Planeta Chaosである。私はこのような協働は、ネットワークの関係を強化し、ネットワークの可能性やどのように活動し共に新しい経験を得られるかについて、全メンバーを鼓舞するのに非常に役立つと考える。

日本とスペインにおける 農村/都市部の協働と交換

日本での Microresidence Networkの経験を終え、私はスペインでも同様のパイロット・プロジェクトが実行できるのではないかと考える。近年、スペイン農村部にはいくつかの独立したイニシアティブが存在する。プログラムの焦点（サステナビリティ、工芸、景観、自然などその他）や、どのように農村部と都市部を繋ぎたいか、パートナーによっても異なる。また、スペインのレジデンスと新たな交換プログラムを始めることを考える際、資金について常に問題が上がることを心に留めておく必要がある。この背景から、私は日本とMicroresidence Networkとの成功例は、スペインのレジデンスもプログラム参加に興味を持つようになると思う。一方、私は可能性ある面白いレジデンスとこのようなプログラムのためのスキーム探しに気を配り続けるつもりである。ぜひこの対話は続けよう。

別紙2. マイクロレジデンス ミーティング

2017年12月20日

参加者：村田達彦、弘子、Jaime、辻

1. マータよりArt Motile報告

Art Motileは4人の管理者と共に2010年に発足。マータが遊工房でインターンをしていた際のリサーチを展開して誕生。

目標として、スペイン、国外アーティストにスペインのAIR情報を提供するため。スペインのAIRリサーチを実施するため。

課題、どのAIRをデータベースに登録するか→多様なプログラムを受け入れるが、適切な情報のみを掲載したいというジレンマ。サスティナビリティ。資金調達、ネットワークのメンテナンス時間の確保。

-AIRやメンバーに関する一般的質問に対する回答責任。ネットワークが特定のサイズに達するとより難解になる。Art Motile は2016年に停止。

近年、マータはAIRを学びの場(非正規教育)として捉え、AIRと大学の協働についてリサーチを実施している。また、オンライン/オフラインのAIRと大学のリサーチもしている。

(ヴァーチャル・レジデンシー：現在実験的に活動[Solitude in Stuttgart](http://www.solitudeinstitute.org)) 参照：

Opening keynote at Transcultural Exchange 2016:

<http://www.transculturalexchange.org/archives/panels/20/page01.html>

ヴァーチャル・レジデンシーは2015年の European Commission (欧州委員会)で出版されたResidencies Handbookにおいても一種のトレンドとなっていた。

<http://www.worldculturesconnect.com/?id=-100430>

この雑誌の中では、アーティストモビリティについて特別焦点が当たっており、ヴァーチャル/オンラインのレジデンスとアーティストモビリティについて、いくつかの記事がある。(ウェブサイトの問題があり、現在詳細は掴めない)

<https://interartive.org/2013/09/issue-55>

2. Microresidence Networkへのアドバイス

特徴的なネットワークの定義2点

- ①フレキシビリティ→ResArtisやAIR-Jなど、より確立されたネットワークや期間とは異なる。
- ②透明性 → ネットワークが個人によって運営され、等身大である感覚。

検討する上での重要点：

メンバー参画 → メンバーがどのように意思決定に関与できるか。多くのメンバー参加は、より多くの人々がネットワーク関与に興味を持つことを意味する。①キーメンバーによる役員や委員の設定。(地域ごとの代表など)

②新規メンバーにどのようにネットワーク寄与できるかを聞く。責任共有。On the Moveのアンケート参照：<http://on-the-move.org/members/join/>

③ ジョブ・シャドーイング。メンバー間でスタッフやディレクターを交換するなどして、相互研修。

- ・AIRのアドボカシー → アーティスト、ホスト、社会にとってAIRの成果とは？
- ・ネットワークのための簡潔な目的 → アーティストのため？プロジェクトパートナーに会うためのAIR？
- ・可視化/カンファレンスやイベントへの参加/ネットワークメンバーとの強いコネクション整備。

④Res Artis, MAJなどとの差別化は？

- ・ネットワークの特徴を定め反映。（デザイン、言語、イメージ、創設メンバー紹介等）
 - ・“家族志向なAIR”や“隔絶”などいくつか、あるいは全メンバーに対する特有の課題に焦点を当てる。
- 一定のフレークワークに従って各メンバーでリサーチをし、互いに共有する。研究者は情報共有のプロセス促進のために招聘される。

⑤新規メンバー検討の際の線引き

- ・新規メンバーに基準を設ける。必要最低限の条件設定。マイクロの点では、天神山AIRは他AIRと比べると異質だが、認識や訪問者を得るには重要な存在。(断る必要ない)

⑥Microresidence Network は国際マイクロレジデンスの視点、MAJはその国内版。

- ・日本で地域的ミーティングやグループ活動を組織するのは、ネットワーク内で関係性を強くする上でいい始発点である。同様の地理的・文化的文脈を共有する団体間で活動すると
- ・共通の関心や課題を探すのもより容易である。また、自国での開催となれば、会議への参加もよりしやすく、安くなる。達彦は手弁当を推奨。

別紙3. オランダ大使館文化政策担当官 Mr. Bas Valckx and Ms. Kim Dangとのミーティング

2017年12月22日

参加者：村田達彦、マータ・グラシア

1. 在日オランダ大使館とAIRプログラム

- AIRプログラム1つの領域

オランダ大使館が現在計画している文化政策の領域の1つとしてAIRプログラムを検討。（2020年までの計画）文化が日本のAIR業界で働く人に興味を持っている背景から。

-以下大使館が関心を持っている活動等

- ・活動の調査訪問: ARCUSのスタッフをオランダのAIRに案内。

<http://www.transartists.org/article/culture-talks-air-japan-december-19>

ARCUSスタッフによる現地調査報告が大使館にて実施される予定。

- ・ネットワークと情報プラットフォーム：大使館は、既存のネットワークのための方法を探し、彼ら(日本AIR)と共同するための日本のAIR情報プラットフォームを提供したい。

- ・AIRプログラムと欧州文化首都 (ECOC): 2018年オランダ大使館はECOCの代表者数名を招いたレセプションを開催予定。（当年はオランダのLeeuwardenがECOC選定都市）遊工房はレセプションに招聘頂ける予定。2018年に Leeuwardenと何か共同活動するには遅いかもしれないが、大使館は遊工房と関心を持っている代表者との1対1の会議を手配する可能性を提供した。

大使館でのミーティング後の達彦アイディア：

ECOCプログラムとAIRネットワークを繋ぐことは面白いのでは？

- ・日本でのオランダAIRプログラム?：詳細は知らないが、オランダ大使館は京都のフランスAIR（ヴィラ九条山、ディレクターCharlotte Fouchet）に関心あり。

2. 遊工房とMicroresidence Network

- 達彦は遊工房について少し紹介。（先方は既にこちらの活動で存知）

- 彼らは Microresidence Network にとても関心を持っており、Transartists の Heidi Vogelsやアーティスト集団The Nakedのメンバーが展開したオンラインの情報プラットフォームを紹介した。https://alternativeartguide.com/

オランダ大使館でのミーティング後、我々はアーティスト・ラン・スペース/プロジェクトによる2つのマッピングイニシアチブの記事を見つけた。

<http://artistrunmap.com/artistrunmap.html>

オランダ大使館でのミーティングを終えて：

オランダ大使館の支援を受けて、オランダのAiR Platform NL (<http://www.transartists.org/airplatformnl>) と日本の Microresidence間での共同/交流はおそらく可能だろう。Platform NL は

Transartists (Heidi Vogels)によってまとめられたオランダのAIRネットワークである。ネットワークとして彼らの経験を知ったり、両ネットワークのマイクロレジデンス間でジョブ・シャドーイングやスタッフ交換をしたり、共通トピックをリサーチすることは興味深いだろう。Platform NL/Transartists はオランダのAIRと他国のAIRやAIRネットワークとの共同を展開するために、Mutual Impulseという特有のプログラムを持っている。

<http://www.transartists.org/activities/mutual-impulse>